

特集 市長新春対談

対談者ケビン・ショート氏

身近な自然と共に暮らすこと

市長 本日はお忙しいところ狭山市においでいただき、ありがとうございます。ケビンさんは日本の古くからの自然、特に里山についての造詣が深く、雑誌のコラムや執筆活動など、多方面でご活躍です。今回は狭山市でも一番大きなこの智光山公園で、新春対談をさせていただきましたことになりました。どうぞよろしくお願いたします。

ケビン よろしくお願いたします。

1 智光山公園について

市長 ケビンさん、この智光山公園は、こども動物園や都市緑化植物園、花菖蒲園などいろいろな施設が揃っています。市民だけでなく近隣市や東京都からも来園者があるんですよ。

ケビン そうですか。私は初めて来ました。この公園は造り方が良いですね。

市長 ありがとうございます。実はこの公園は私の父が市長のときに

できたものなんです。自然を大切に、もともとあった木をそのまま残すような形で造っています。

ケビン 日本の公園はまず木を伐採し、團扇型種の木を植えて造るけど、ここは残しているから良いです。それに、さつき落ち葉掃きをしている男性がいましたが、あんな風に地元の人が公園の自然に関わっていて、昔のままなのが素晴らしいです。まさに暮らしの中に自然があり、とても理想的なことですね。

2 里山と身近な自然

市長 とくでケビンさんは、大都会ニューヨークのご出身ですね。どうしてナチュラリストの仕事に興味を持たれたんですか。

ケビン 私はニューヨークに住んでいたけれど、夏休みはたいがい田舎で過ごしていたんです。日本の自然に興味を沸かしたのは、兵役について来日したことがきっかけです。

市長 そうなんですか。ケビンさんはその日本の風土の中で、特に里山について大変熱心に研究されていますが、狭山市をご覧になってどう感じますか。

ケビン そもそも、日本には原生の自然が少ないんです。例えば白神山地とか屋久島は原生ですが、狭山丘陵などはそうではなくて、昔から長い時間をかけ、人の手によって暮らしの中で作られてきた自然なんです。これらの自然は里山またはカントリーサイドと言い、日本はこういう自然がとて豊かです。狭山市にもかなり豊かな里山自然が残っていると思います。

市長 ありがとうございます。
ケビン しかし、人が作り上げた自然は人が手を入れないと姿が変わってしまうんです。例えば、智光山公園で見られる開けた落葉樹の雑木林は、下草刈りをやめると密集した常緑樹の森になってしまふ。そうなる開けた森を好むカタクリなどの植物がなくなってしまうんです。

市長 なるほど。ところでケビン

ケビン・ショート氏プロフィール(博物学・自然史ライター)

1949年、ニューヨークのブルックリン生まれ。1972年、来日。1975年、上智大学を卒業後アラスカで文化人類学を学ぶ。1977年、アラスカ大学で修士号を取得。その後北海道小樽市の祝津に滞在し、漁業の資源管理を調査。1991年、日本の漁業権制度の研究でスタンフォード大学から博士号を得る。永年の日本滞在により、日本文化の原風景である「里山」の自然に魅せられ、ナチュラリストとして新聞・雑誌への寄稿、テレビ・ラジオへの出演、自然観察会・講演会の講師などを通じて、環境教育活動を積極的に行っている。著書に「ケビンの里山自然観察記」「ケビンの観察記 海辺の仲間たち」「東京の自然」(英語)など。現在は北総台地の里山自然が色濃く残る千葉県印西市に在住。





さんがおっしゃっている「里山」というのは、どんなものですか。
ケビン 里山とは、ただ雑木林のことを言うのではなく、田畑や森林などの農家型の自然のことを言います。「カントリーサイド」ですね。イギリスではこのカントリーサイドの保護事業がとて盛んです。
市長 アメリカはどうですか。
ケビン アメリカは、国が大きいから膨大な原生自然が残っています。でも、ドイツやイギリスは、日本と同じで原生自然はあまり残っていない。あるのは農家が大事にしているカントリーサイドの自然です。
市長 確かにアメリカで高速道路

を走っていると、動物保護区などが沢山ありますが、あれは広大な土地があるから維持できるのでしょね。では、人工の自然が多い日本では、これからどうしていったら良いと思いますか。
ケビン 現役の農地として農業を行いながら、自然を残していかなければなりません。農業を続ける中で、

里山の役割を果たしながら守られていくというのが理想です。そしてそれには下草刈りや炭焼き、落ち葉掃きを、これからまず農家の人がやってもらえる環境を作ることです。
市長 自然をそういう方法で残していくためには、日本は農地の相続が難しいので、法的に保護するということが必要になってきますね。
ケビン その点では、ヨーロッパに比べると日本は遅れています。ヨーロッパでは、EUが、農業を生産産業というよりも自然を守る意味でのものであるという考えでいます。これは具体的に言うところ行政から助成金を出しているということです。自然保護型の農業は手がかかるし能率が悪い。でもそれを国で補うことができていますね。この点は、日本ではまだ歩き始めたばかりですね。
市長 そうですね。日本では生産力を高めるにしても、小さい国で土地がないから大変です。しかし、戦後は生産率を上げるためだけの農業

だったのが、最近になってケビンさんがおっしゃるように随分変わってきた。それが自然を守るという運動につながっているんです。
ケビン そうですね、とても良いことです。

3 ヨーロッパと日本の施策

市長 さて、ケビンさんは狭山市に隣接する所沢市や川越市などにまたがる三喜地区をこ存じですか。江戸時代に開拓され、畑と山林を一体として、自然を活用しながら農業を続けている地域です。市内に同じような環境の地域があるので、それを今、狭山市と市民団体や埼玉県が一緒になって守ろうとしているんです。
ケビン そうですが、自然保護型の農業が続けられている地域。ぜひしっかりとした保護をしてください。
市長 そういった環境保護について、ヨーロッパやアメリカでは新しい政策がありますか。特にNPOの活用という点ではいかがでしょうか。
ケビン 山林を維持管理しながら畑作を続けている農家に対し、国が契約を結んで助成しています。これは各農家ごとに、例えば山林の下草刈りを1年間続けていくら…とか、落ち葉掃きをして堆肥を作り、それを使っている農家には、1年いくら…

とか、そういう感じです。要は、農家にとって労働が増える分、国が補助しているというわけです。

市長 日本では農地より山林の方が値段が高いから、相続が発生したときにはそれを売ることが多くなっています。狭山市でも農家が山林をたくさん持っています。それを適正に管理・保全するために、農家の人と話し合って、管理は市が行い、相続のときは優先的にそれを買いたいということを行っています。こうすることによって農家の人が安心して山林を維持できます。さらに、買い上げると言っても市では買い切れないような金額のことが多いので、埼玉県にも協力していただいています。
ケビン 良いアイデアですね。イギリスではトラストに山林を寄附することが多い。国民一人一人が自然の大切さを十分理解しているんです。
市長 そうですね、その証拠に市民団体の活動も盛んですね。私は市民や国民の皆さんに、「自然は自分たちの財産だ」と思ってもらいたいです。そしてその財産(自然)を、自分たちの子や孫に伝えていくという考えです。

ケビン 日本もだいぶそういう気運が高まってきていますね。

市長 私は県議時代に、ドイツに視察に行ったことがあります。その町では観光地としての開発を進めよ